

ラテンアメリカ時事解説

ベネズエラ大統領選挙に向けた展望

村上 猛

はじめに

6月10日にカプリレス野党統一候補が、翌11日にチャベス大統領が、大勢の支持者を率いて全国選挙評議会（CNE）に大統領選挙の立候補届け出を行った。立候補を届け出た者は他にも数名いるものの、10月7日に行われるベネズエラ大統領選挙は、チャベス大統領の容態が急変して出馬を辞退せざるを得ない事態にならない限り、事実上2人の一騎打ちになることが予想される。

ベネズエラの大統領選挙は、決選投票なしの相対多数の一回の投票で勝敗が決定する。しかし、今回の大統領選挙に関しては、選挙前にチャベス大統領の圧勝が予想されていた2000年と2006年の大統領選挙とは異なり、野党勢力が過去に例を見ないくらいに団結しているのに加え、チャベス大統領の健康不安が選挙戦に終始陰を落としていることから、現時点で勝敗の見通しを立てるのは非常に難しい状況にある。

それを踏まえた上で、本稿では選挙戦の展望を不透明にしているチャベス大統領の健康問題について時系列的に振り返ると共に、チャベス大統領とカプリレス野党統一候補の特徴を比較し、両者の最近の動きについて整理することにより、選挙戦に向けた今後の展望を示したい¹。

1. チャベス大統領の健康問題

チャベス大統領は昨年6月、外遊先のキュー

バで骨盤膿瘍の手術を受けた際に悪性腫瘍が発見されたとしてその摘出手術を受け、その数日後に自身がガンに罹患していることを告白した。チャベス大統領はその後、昨年7月から10月にかけて化学療法によるガン治療を受けるために計4回キューバを訪問した。

10月後半からは、メディアを通じて公の場に登場する機会が徐々に増え、今年1月には国会での年頭演説でトイレ休憩なしの9時間半に及ぶ演説を行うなど自身の健康ぶりをアピールしていたが、今年2月、昨年6月に摘出した悪性腫瘍があったのと同じ箇所にガンの再発が発見され、それを摘出した。その後、放射線療法によるガン治療を受けるために、3月下旬から5月初旬にかけて計5回キューバを訪問した。

5月11日にキューバからベネズエラに帰国したチャベス大統領は、「残念ながら、私はもう暴れ馬ではいられなくなった」と自ら認めているように、精力的に活動していた以前とは打って変わり、今では、全く何の音沙汰もない日があれば、メッセージの配信が国営テレビへの電話出演や自身のツイッター（@chavezcandanga）にとどまるなど、公の場に姿を現さないことが多くなった。チャベス大統領の音沙汰が全くない日が数日続くと、毎回のようにチャベス重篤説の噂が飛び交ったりするが、そうした際にはチャベス大統領はまるで時宜を見計らったかのように公の場に姿を現し、健康不安の払拭に力を注いでいる。

6月11日には、健康不安が噂される中、チャ

¹ 本稿の内容は、本年6月15日時点のものである。

ベス大統領は街宣車に乗って、街頭に参集した支持者の群衆の中を大統領府から全国選挙評議会（CNE）本部まで移動、立候補届け出を終えた後、CNE 本部前で歌や踊りを披露しながら約 2 時間 40 分の演説を行い、10 月の大統領選挙に自ら出馬する意思を改めて国民に表明した。



街宣車に乗り大統領選挙の立候補届け出に向かう
チャベス大統領（AP）

2. 野党予備選挙とカプリレス野党統一候補の選出

過去 2 回（2000 年と 2006 年）の大統領選挙は、野党候補者がチャベス大統領に全く勝ち目がなく惨敗する結果であったが、今回は野党連合 MUD（民主統一会議）が早い時期から協力・団結して、今年 2 月 12 日に統一候補を選出すべくベネズエラで初となる全国区の野党予備選挙を実施した。この予備選で、エンリケ・カプリレス・ミランダ州知事が 64.2% の得票率で他の候補者 4 名に圧勝し、野党大統領統一候補に選出された。野党予備選の投票率は、選挙前に 10% 前後であろうと見られていた大方の予想を上回る 17.1%（約 304 万票）となり、野党勢力の躍進を印象づける結果となった。

カプリレス野党統一候補は、ユダヤ系の両親を持つ資産家の家系で、39 歳と政治家としては

比較的若いながらも、これまでに国会議員（1998 年-1999 年）、カラカス首都区バルータ市長（2000 年-2008 年）、ミランダ州知事（2008 年～、大統領選立候補に伴い現在休職中）を歴任している政治経験の豊富な人物である。

3. チャベス大統領とカプリレス野党統一候補の対照性

（1）政策

チャベス大統領は 1999 年に政権に就任してからの 13 年間、「21 世紀の社会主義」をスローガンに掲げ、石油をはじめとする基幹産業を国有化して国家経済に対する政府の管理を強化し、潤沢な石油収入を資金源に、「ミッション」と称する貧困層対策の社会プログラムを実施し、教育、医療、雇用分野の社会保障を手厚くする政策を実施してきた。その一方で、民間企業の接収や反政府系メディアの弾圧を強権的にやり、司法権や選挙権を形骸化させる一方で、大統領の権限と中央集権化を強化してきた。6 月 11 日の立候補届け出の際には、10 月の大統領選に勝利し、来年 1 月に新政権をスタートさせて以降は、社会主義路線をより一層深化させていくと明言している。

他方、カプリレス野党統一候補は、雇用創出、「ミッション」の強化継続、治安対策、教育の 4 本柱から成る「進歩のための公約」（Mi Compromiso con El Progreso）を発表し、民間企業や私有地の接収は行わない、外資の導入により国内産業を多角化させ、石油依存経済からの脱却を図る等の選挙公約を公言している。

（2）選挙キャンペーン

今回の大統領選挙の公式の選挙キャンペーン期間は 7 月 1 日から 10 月 4 日までであるが、実際には、チャベス陣営、カプリレス陣営とも 3 月頃に選挙対策本部を設立し、既にプレ選挙

キャンペーンを行っている。特にチャベス陣営に至っては、昨年から今年にかけて立て続けに6つの新たなミッションを発表するなど、大統領選挙を見据えて既に早い時期から、豊富な選挙資金を元手にばらまき政策を行っている他、国営メディアを通じて政府のプロパガンダ番組を毎日四六時中放映している。一方のカプリレス野党統一候補は、3月初旬から6月中旬現在にかけて、自身の知名度を高めるべく全国各地を遊説し、有権者各家庭の戸別訪問を行っている。いずれにせよ、政権与党としての豊富な資金を有し、主要メディアを牛耳っているチャベス陣営がカプリレス陣営よりも圧倒的に有利な条件で選挙戦を進めているのは明らかであり、この状況をいかに克服するかがカプリレス陣営にとっての大きな課題となるであろう。

チャベス大統領の選挙演説の特徴は、反帝国主義、反ブルジョア主義のレトリックを巧みに利用し、敵対する相手にその逆のレッテルを貼付けて二極対立を必要以上に煽る点にある。カプリレス野党統一候補に言及する際も、ユダヤの家系で富裕層出身の出自に「ブルジョア」(burguesía)のレッテルを貼り、「ニヒリスト」や「無能な奴」(majunche)といった侮蔑的な呼称を頻繁に用いることによって、攻撃の対象をチャベス派の聴衆が理解しやすいように差別化している。

これに対しカプリレス野党統一候補は、演説の中でチャベス大統領に言及する際は「もう一人の候補者」(otro candidato)と呼称し、チャベス大統領への直接批判を極力控えることによって二極対立のロジックに陥るのを巧みに回避し、努めてチャベス派と反チャベス派を差別化しようとし不在の演説を行っている。

今回の選挙戦では、病身で健康不安を抱えるが故、カラカスやハバナなど一カ所に留まって国民にメッセージを送ることを余儀なくされて

いるチャベス大統領と、若さと鋭さを全面に出して精力的に全国を遊説しているカプリレス野党統一候補の対照性が特に際立っており、カプリレス野党統一候補のこうした地道なドブ板戦術が、チャベス大統領の知名度と選挙資金と既存勢力の牙城をいかに切り崩せるかが今後の注目点となる。



支持者と共に歩いて大統領選挙の立候補届け出に向かうカプリレス野党統一候補 (AP)

4. 今後の展望

今回の大統領選挙は、チャベス大統領の4選を賭けた戦いである。これまで危なげなく大統領選を勝ち抜いてきたチャベス大統領は、思いもよらぬ健康不安と野党勢力の躍進に直面し、ここに来て正念場を迎えている。野党勢力にとってみれば、13年間続いた政権を奪取する絶好のチャンスと言えるだろう。

7月1日に公式の選挙キャンペーンが開始されれば、10月の大統領選挙に向けて与野党両陣営の対立は益々先鋭化することが予想される。チャベス陣営は政権与党としての既存のアドバンテージをフル活用し、今後もしばらまき政策とメディア戦略を中心とする選挙戦を展開するであろうが、同時にチャベス大統領の健康不安を払拭することが大きな課題となるであろう。カプリレス陣営にとっては、このまま一枚岩の団

結を崩さずに、ドブ板戦術を中心とする効果的な選挙キャンペーンを実施し続けていくことが必要不可欠となる。その上で、両陣営に共通する課題として、有権者の3割近くいるとされる「Ni-Ni 層（チャベス派でも反チャベス派でもない有権者層）」(ni Chavista ni anti-Chavista)の票をどれだけ自陣営に取り込めるかが、大統領選の勝敗を握る大きな鍵になると考えられる。

しかしながら、チャベス大統領が容態を悪化させ、選挙戦途中で出馬を辞退せざるを得なくなる可能性も皆無ではなく、そうなれば状況は一変し、大統領選挙に向けた展望はさらに不透明なものになると予想される。「チャベスなきチャベス主義」(Chavismo sin Chavez)は存在しないと言われるように、チャベス大統領の政治的手腕とカリスマ性に依存するところの大きい

与党 PSUV（ベネズエラ統一社会党）は、もしチャベス大統領に不測の事態が生じれば内部で後継者争いが起こる可能性があるし、それに伴う国内の混乱が長期化すれば、大統領選挙が10月7日に予定通り実施されるかどうかもうくなるかもしれない。要すれば、チャベス大統領の健康不安に関連して、あらゆるシナリオが想定しうるわけであり、今後も大統領選に向けては予断を許さない状況が続くであろう。

本稿の内容は筆者個人のものであり、筆者の所属する組織の見解を示すものではない。

（むらかみ たけし 在ベネズエラ日本国大使館 専門調査員）

~~~~~ [ラテンアメリカ図書案内] ~~~~~

### 『メキシコ その現在と未来』

安原 毅、牛田千鶴、加藤隆浩 行路社 2011 年 9 月 217 頁 2,400 円+税

日本メキシコ交流400周年とメキシコ革命100周年を記念して南山大学で開催した3回のフォーラム成果を纏めたものである。転換期のメキシコの姿を描き出す9本の論考からなっており、前半4章でオアハカ州先住民の移動と共同体・地域の変革の可能性、メキシコからの対米移民の変容、米国の1975年および82年投票法改訂の際のヒスパニック組織の言動、グローバリゼーションの時代に先住民がどのように生きているかを取り上げている。

後半5章は、国際収支制約からみた輸入代替工業化経済開発の検証、思想家で政治家でもあったホセ・バスコンセロスと近代メキシコ壁画運動時の壁画家たちとの確執、ユカタン半島のカンクン観光開発にともなうマスツーリズム状況下にあるマヤ系先住民の自律性、国民的儀礼となり、各地で盛大に祝われるようになった「死者の日」の観光化に対して、伝統を再編成しようとする各地の動きを、最後にピラミッドとテキーラに代表されるナショナル・イメージを、前者を先スペイン期、後者をスペイン植民地期の文化遺産として広く世界遺産として認識されていたかを述べている。

メキシコの過去と現在、そして未来を多岐にわたる切り口からみており、あらためてメキシコを理解する上で参考になる論考集である。

~~~~~ [桜井 敏浩] ~~~~~